



# カンボジア東西南北

- 武装警察官・軍隊千人動員、プノンペン最大のスラム一掃・強行立退き実施 -

やぎさわ かつまさ  
八木沢 克昌

社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) カンボジア・タイ事務所長

「カメラを没収だ。外国人を入れるな」。武装した目つきの鋭い警察官の声が、響いた。

警察官に「バサック・スラムに隣接するスラムの子どもたちの教育支援事業を視察に来た」と、説明して運よくカメラを没収されることはなかった。

2006年6月6日。前任国の社会主義国ラオスからカンボジアへ赴任して5ヶ月後の事だ。カンボジアは、今、雨期の最中。日中は35度近い炎暑となる季節。

カンボジアの首都プノンペン最大のバサック・スラムの完全一掃、強制立退きの執行開始から二時間後の朝8時のことだった。

バサック・スラムに隣接する隣のスラムの路地裏を通り抜けてバサック・スラムの正面の別のスラムの道路に面した茶店で、立退きの様子をスラムの住民に混じって見ていた。

スラムの住民たちの仮の住まいの小屋が次々と壊されていた。スラム住民と共に僅かな家財道具と竹や柱、板切れ、ゴザ、ビニールシート等と一緒にトラックに乗せられて移動させられていた。

武装した警察と軍隊の数に唯、啞然とした。何と千人の武装した警察官と軍隊が動員されていた。銃、催涙弾、盾、ヘルメット等に身を包み、完全に武装した警察官と軍隊がスラムを包囲していた。スラムの住民たちは、警察官と軍隊の数と銃の前に全く無抵抗。

スラムの茶店には、カンボジア人の著名な人権活動家も道路の前で警察の様子を伺っていた。武装した警察官と取り壊されるスラムの住民たちの小屋とトラックを5枚撮った。

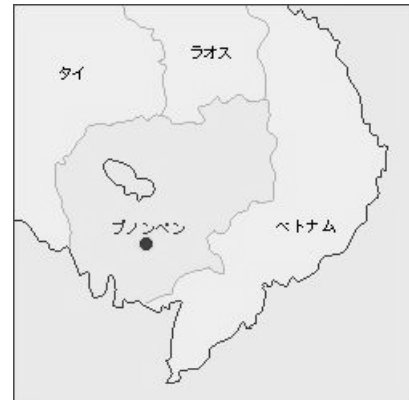
しかし、目つきの鋭い警察官がこちらに常に鋭い視線を浴びせていた。そして、何やら無線で上司らしき警察官と連絡を取っていた。

その目つきの鋭い警察官が、私の方に近づいて来た。とっさにカメラのメモリー・カードを抜いた。「何も映っていません」と言おうとする前に、メモリー・カードを出して、カメラに入れて撮った写真を見せなさいと、言われてしまった。

「今すぐ撮った写真を削除しなさい」。他の写真までチェックし始めたので、これはもしかするとカメラの没収だけでは済まないかもしれない、最悪の時は身柄拘束かと覚悟を決めた。

この日は外国人らしき人やマスコミ関係者の姿は殆どなかった。結局、警察官の映った写真だけを削除してカメラもメモリーカードも返して貰えた。「写真を撮るな」と、念を押されて解放された。

外国人やマスコミ関係者に写真を撮らせないことが警察と軍隊の末端まで徹底されていた。やはり当局としては、国際社会に千人を超える特別の警察や軍隊の武装した治安部隊を動員し、スラム住民の強制立退きの映像として流されることを極端に嫌っていると思った。後で知ったが、カンボ



シア人ジャーナリストが一人この日逮捕されている。

スラムは、仕事に近い場所に形成されるのが常だ。立退きさせられたら生活の糧を得るための仕事を失うことは明白。スラムの人々も建設現場等で、一日約2ドルという賃金で不安定且つ危険な仕事に就いて安い労働力を提供してカンボジア経済の発展に寄与している。

結局、6月6日と7日の両日で、バサック・スラム周辺を含めて千八百世帯、九千人が強制的に立退き、プノンペン郊外、17キロの田圃の中に移されてしまった。スラムの住民は、一ヶ月の間に、長年住んだ家と仮の小屋を含めて住む場所を三回壊されて、とうとう別の場所に移動させられた。

移された場所は田圃の中で雨が降れば水浸し、衛生、環境は劣悪で伝染病も心配される。水道も電気もトイレもない。そして、生きて食べるための仕事も無い。まさに棄民に等しい。

千人を超える警察と軍隊の武装した治安部隊の数により住民との最悪の流血の惨事だけは、避けることが出来た。しかし、カンボジアの現在の人権軽視と金権政治、汚職、制限された言論の自由の現実をスラムの立退きを通して見せ付けられた。

21世紀の今、カンボジアの首都プノンペンのど真ん中で起きた事件。このスラムの背後には、中国の援助で建設中の国会議事堂がある。プノンペ

ン市当局は、このスラムを立ち退きさせてこの跡地をショッピングセンターやホテルを建設するという。

中国の影響はカンボジアはもちろんラオス、ミャンマーといった国でも環境や人権を無視し、賄賂、汚職絡みの援助や経済活動が行われている。

プノンペン市内には、現在、人口の約3割、約700ヶ所、30万人がスラムに住むといわれている。農村から首都プノンペンに移動する人口は、年間2万人。これからもスラムは増え続ける。しかし、これから首都の土地の異常なほどに高騰するバブル経済と開発と街の美観を守る名のもとにスラムの立退きが起こることは、明らかだ。

プノンペン市当局は、年間100ヶ所のスラムを立ち退きさせてプノンペンの美化と開発を図るといふ。スラム問題の背景には、農村の貧困や政府の無計画の経済開発や富の再分配等の問題があることは、隣国タイの例でも明らかである。

カンボジアに対する最大の援助国、日本のNGOの職員としてあまりにも無力なスラムの立退き問題だった。人権問題の解決や民主化された社会の実現には、これから長い視点で取り込まなければならないとつくづく思った。

やはり地道な教育の機会の向上の支援が必要だと痛感させられた。